

もう一つの「酒楼」にて ——代田智明先生を送る——

石 井 剛

わたしが初めて代田先生と一対一で向かい合って酒を酌み交わしたのは、2008年4月、わたしが駒場に赴任直後、最初の教授会が行われたあとのことだ。教授会の席上で、すうっとわたしの手元に渡された紙片に、会議後近くで一杯やろうという旨の誘いのことばが書かれていた。駒場はわたしにとってなじみのない場所ではなかった。博士課程時代には授業や学術イベントでしばしば本郷から出向いてきていたし、都下の私立大学で職を得たあとにも中国語非常勤講師として週に一度通っていたからだ。しかし、正式にファカルティ・メンバーになってみると、周りは学生時代には仰ぎ見るだけのまばゆい存在であったきら星のような先生方に囲まれ、自分の存在がひどく場違いで不釣り合いなものに感じられ始めた。そういう中であったから、この誘いは救いの手のようでもあり、同時に厳かなものでもあった。魯迅研究で斯界に名を馳せる東大教授の審問に召される緊張感とでも言おうか。果たして、その晩の会話は訥々として盛り上がらなかった。誘われる側が不要な緊張感を脱することができなかったのだ。だから何を話したのかはほとんど覚えていない。その後、代田先生と「さし」で飲んだことはいままで一度もない。しかし、駒場赴任後の最初の一年をいささか危なっかしく過ごしたわたしを見るに見かねたのだろう、年度の暮れには、夜間、人気のなくなった18号館で悶々と残業に苦しむわたしの部屋をふらっと訪ねて、忠告と激励のことばを諄々と説いてくれたこともあった。わたしの駒場での仕事が軌道に乗り始めたあとには、中国語部会ラウンジのソファで、昨今の学生のこと、授業のこと、大学のこと、日中関係のことなど、とりとめのない四方山話に興じることはしばしばあり、そのまま今日に至っている。いまこうして、その一幕一幕を思い出してみるに、すべては、9年前に最初の盃が交わされた、あの居酒屋「さわやか」での光景に重なってくる。

「何を話したのかはほとんど覚えていない」と書いた。しかし覚えていることもある。それは、駒場の教育は結局のところ前期課程なのだという「教え」である。一義的にはそれは中国語教員としての矜持の表明ということになろう。文学研究者でもあり、中国地域文化研究者でもあると同時に、中国語の基礎教育をすることの難しさと尊さを、当時のわたしは不安とともにただ厳粛に受けとめたのだった。

だが、最近になって少しわかってきたことがある。結局のところ前期課程なのだと

う駒場の教育とは、要するに人文教育なのである。文系理系という分類に先立つようなものとしての人文教育、それが許されている場として駒場はある。突拍子もない喩えだが、そのような教育は、代田先生が自任している「暇人」の特権なのだと思う¹⁾。しかも、代田先生の場合、それは戦闘性を内に秘めたコウモリのような「暇人」である。「コウモリ」については、次のような解説がある。

たとえば対立する両者がいるとき、その両方から排除攻撃されることを覚悟しようという言説戦略である。鳥からも獣からも、仲間はずれになっても、鳥の悪口も獣の悪口も言い続けようという批評のスタンスである。そのことによって、コウモリも引き裂かれるだろう。だが引き裂かれる主体なくして、「他者」に開かれた自己なぞ存在しないのだ。そして引き裂かれることにしか「主体性」は機能しないだろう²⁾。

何者でもないことによって無限の他者に開かれた批評的主体性を獲得すること、言い換えれば、自らを「マイノリティー」に位置づけることにおいてある種の主体たろうとした魯迅の響みに倣うこと、それが「コウモリ」の眼目であろう。代田先生は、これを「暇人」として引き受けている。

ところで、「暇人」とは魯迅の小品『酒樓にて』の語り手が自らを呼ぶ言い方である。「わたし」は北から東南への旅路の途中、故郷からほど近い、かつて教員として一年ほど働いたS市に立ち寄る。しかし懐かしいはずの街の様子はすっかり変わり、知人もいない。ただ酒樓「一石居」だけは昔の佇まいで営業しているが、そこに働く人びとももはや同じではない。慣れ親しんだ店で、はからずもストレンジャーとなった「わたし」は、人がいない2階の、「廢園」を見下ろす席に腰掛け、独り酒を楽しむ。だがそこは酒樓だ。孤独の愉しみは必ず破られる。「わたし」は、中国を改革する夢が挫折して郷里で伝統学問を教授しているという旧友にでくわし、盃を交わす。「わたし」もまた理由はわからないが彼に負い目を感じている。そう、二人はいわば、「だめになっ」³⁾て再び故郷で遭遇したのだった。

きっと、彼らもかつてはこの酒樓で喧々囂々の議論を闘わせたのだろう。その面影はいまない。「だめになった」のは彼らだけではない。酒樓に行き交う人びと、そしてそれらを取り巻く社会がみなそうなのだ。酒樓の外では、湿気を含んだ重たい雪が降りしきっている。「家屋も街の通りも、真っ白で定まりのない深い雪の編み目の中に織り込まれていた」⁴⁾。この世界は粘着質の重たい因襲と伝統に覆われ、揺らめいている。

だが、とわたしは思う。彼らにもきっと希望はあったのではないだろうか。「わたし」は2階の窓から「廢園」をのぞく。そこには湿って重たい雪をかぶった梅と椿がそれでも花を咲かせている。「わたし」はそのすがたに「暇人」を蔑む憤りと傲慢を見いだす。酒樓に集う人びとはつねに変わり、それを取りまく時代も移ろいゆく。しかしそれでも、

廃園の花はやはりそこに立ち続け、滑り落ちた雪の下からすっくと枝を伸ばしては、酒樓の過客たちを叱咤するのだ。友人が届けようとしたビロードの髪飾りはすでに間に合わなかった。しかし、間に合わなかったことによってこそ、すべてが「抱擁」されるのだとすれば⁵⁾、そこに「あるともないとも言えない」希望を見いだすことも不可能ではなからう。いや、それこそが魯迅にとっての「地上の道」だったのではないか。

代田先生の退職を祝うべき小文でとりとめのないことを書いた。それは「注文」に追われてばかりで我を忘れていた酒樓のボーイが、ふと窓辺の「暇人」に気づいて抱いた妄想のようでもある。だが、それでもボーイの明日は、きっと昨日までとは異なっているのである。

感恩。

注

- 1) 代田智明『現代中国とモダニティ～蝙蝠のポレミック～』、三重大学出版社、2011年、p. 23。
- 2) 同、p. 14。
- 3) 代田智明『魯迅を読み解く 謎と不思議の小説 10 篇』、東京大学出版会、pp. 135–157。
- 4) 魯迅「在酒樓上」、『魯迅全集』第2巻、人民文学出版社、2005年、p. 34。日本語は拙訳。
- 5) 魯迅「祝福」、前掲『魯迅全集』第2巻、p. 21。